

ISの世界に来たけど今日も今日とて推しがかわいい

平均以下のクソザコ野郎

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

もうちよいでの三十路な独身OLの津上百合子は29の誕生日に刺殺されてしまう。

それを見た神様の手と同情と哀れみで特典付きの転生をすることに。

転生先はISの世界。

「…………この子たちすげえかわいいヤバいしぬ」

『雑種よ死ぬな。我に魔力を貢げ』

「誰かツツコミを変われ」

「それは俺にいってんのかおん??」

最強キヤスギルともう一人の転生者と幼馴染み大好き（だがハリセンで突っ込む）一夏で贈るギャグ小説です。バトルはあるけどポロリはないよ！

## 目 次

第0 通り魔マジ許さねえけど美少女見れるなら感謝したい。サン キュー通り魔	1
第1 もう一人の転生者	4
第2 クソザコナメクジな精神年齢40代が美少女だらけの高校に 入学しました。いえーい	7

# 第0 通り魔マジ許さねえけど美少女見れるなら感謝したい。サンキュー通り魔

「（）ーーるでええんういーーくうはしい（）とおーじやないよーー、だから推しはみつれるのさああ」

酔つ払いながら意味のわからない歌を歌う女性。

彼女の名前は津上百合子。独身のあと一年くらいで三十路を向かえるクソザコナメクジである。

どうやらネッ友たちとの飲み会の帰りのようだ。

「ふううーう!!」

くるくると回りながら歩く百合子。

どこぞの探偵のようにコカインでもキメているのかというキチガイっぷりである。

そのどこぞの探偵の事をキチガイと言うつもりはないので悪しからず。

たつたつたつたつた……

「んん…？」

ドスツ

そんな百合子の腹を激痛が襲う。

原因は……百合子に刺さった、ナイフ。

「…………」

病弱ピンク髪セイバーを彷彿とさせるうめき声をあげ、百合子は崩れ落ちる。

（推しの…………マンガ…………見てない…………）

意識を失い、百合子のその手は力なく倒れた。

「…………と、まあこんなものかナ。要するにキミは、死んじゃったのを私の同情と哀れみでここに来させたのサ」

「……はあ

ちやぶ台と畳がある和室。

百合子は目の前にいる胡散臭そうな男性の顔を見ながら、困惑しながら言う。

「…………えーと、それって……」

「ああ、キミの思う事はわかるさ、そして……で私が言うべき事はこれだネ」

男性は告げる。

「おめでとう、独り身のオフィスレディ。君は私の手と哀れみと同情によつて『神様転生』が認められた」

「…………マジすか」

「マジマジ、大真面目」

男と百合子はいつのまにかちやぶ台の上にあつたせんべいをボリボリかじりながら話す

「…………あんた何者ですか、神様である事は間違ひなさそうですが」「はつはつは！ 神様と共に同じ卓でせんべいをかじりながら美青年の事を考えている君に言われたくないとモ！」

「…………まあ、一応それが毎日の希望なんで」

男は囁んでいたせんべいを飲み込み、口に着いたせんべいのかすを取りながら言う。

「…………さて、百合子くん」

「あ、名前は知つてるんですね」

「当たり前だとも。特典…………いうものをあげたいんだが、思い付いたかい？なんでもいいぞ、ただし5つだ」

「…………ふうむ」

長考。

「…………」でならふつうは最強野郎にしようとするんだが…………そ  
うした所でなんになるのだろうか、うん  
よおしわかつたぞ

「決まりました」

「言つてみたまえ」

「うちの絆10レベルマスクルマフオウマの最強キャスギルさんと回避能力と性転換能力と危機察知能力、後は……」

「うん?」

「……………容姿をこのブス顔から少しでも変えてください……………」

「……………切実な悩みだネ」

このあと滅茶苦茶キャラメイクした

# 第1 もう一人の転生者

朝比奈 孝二は善良な男である。

ヘタレで煽り癖があるが善良な男である。

そんな孝二是、ある日死んだ。

トラックによる轢殺ではなく、誤つて食べてしまったキノコの毒によつて。

孝二も百合子と同じく、神に特典付きの転生をさせてもらつた。  
彼はヘタレで煽り屋だが、お人好しであつた。

……海外旅行の時に夫婦を助けるくらいには。

「孝二、私から離れるなよ」

「あなたもよ、こんな世の中なんだから」

「わ、わかっているとも」

「……」

人がこみ合う列車の中。

白い髪で妙齢の男性『朝比奈 雄大』と、それより年が下そうな女性『朝比奈 貴久子』。

その二人にくつついているのは、茶髪がかつた髪の少年で、転生者の『朝比奈 孝二』と濃い紫髪の少女『朝比奈 春日』。

四人は自身の席に座り、運転手の指示を待つていた。

「……」

『……大丈夫、ですか?』

茶髪の少年は隣に座る白人の男性に少々ぎこちない英語で声をかける。

白人の男性は声をかけられて驚くが、

「……ああ、日本語で大丈夫だよ、坊や」と笑顔を見せる。

「そうですか」

孝二は少しだけはにかんでもみせる。

白人男性は雄大に話しかける。

「……ご家族との旅行ですか？」

「え？ああ。はい、休みを取つての家族サービスです」

「そうだったんですか…災難でしたね」

「お互いそうですよ。そちらはどうですか？」

「はは…仕事の出張で……上司の妻と」

雄大は驚き、聞く。

「奥様が？」

「はい。私が秘書で、妻が社長です」

「……なるほど、奥様は？」

「ああ、少し連絡を取りにいっています」

そんな風に話していると、白人男性のポケットから一枚の写真が落ちる。

孝二はそれを素早くキャッチし、男性に渡す。

「どうぞ」

「ああ、ありがとう」

「…写真ですか？」

「ええ、娘の写真です。少しだけ気難しい所もありますが、可愛い愛娘ですよ」

そう話す白人男性。

すると……

「…おい、あれは？」

乗客の一人は外を指差す。

外にいるのは謎の集団。

黒い服に身を包んでいる。

「…」

乗客達が沈黙に包まれた時、集団は……

大量の銃口を向ける。

「伏せて！」

「えつ」

ダダ  
乗客に大量の銃弾が襲いかかる。  
!!!!!!

窓ガラスは割れ、多くの乗客達が殺された。

生き残った家族と男性を仕留める為、銃を構えて列車に侵入しようとする

「…?!?」

「……仕方がない、孝二。ドライバーを」

「…うん、父さん」

孝二は父親に黒いドライバーを渡す。

「……ありがとう、お母さんと一緒に下がっていなさい。貴方も」

「は、はい。」

父親は立ち上がり、ドライバー『戦極ドライバー』と『メロンロックシード』を持つ。

ロックシードを顔の近くに持つていき、解錠する。

『メロン!』

「…変身」

『ロック・オン』

法螺貝の音が鳴り響き、カッティングブレードを下ろす

『ソイヤツ!』

メロンが父親の頭を覆う。

そして、それと同時に開かれ……父親は、戦士となる

『メロン・アームズ! 天下・御免…!!』

白い鎧武者『仮面ライダー斬月』、推参。

第2 クソザコナメクジな精神年齢40代が美少女  
だらけの高校に入学しました。いえーい

どうも皆さん、津上 百合子です。

転生しました。

私のようなクソザコナメクジの行方より、私の特典であるキヤスギルの方が気になるでしょ???

私、気になります！つていえよ、おい。

まあ冗談はさておいて。

私のキヤスギルは、私の付けているミサンガ……『IS』の人格という風変わりなポジションです。

ちなみに会つたら頭わしやっとされました。

魔術は健在のようで、一安心。わたしの要望も叶つてなによりでございます。

転生特典の確認します。

まずは性転換。

まずは全身に力を入れてみる。できない。

自分は女だと自己暗示をかけながら目をつぶり、ゆっくりと目を開ける。できた。

あ、さつきの私の性別は男でした。

「…………まあ、他の特典は実戦でも来ない限り試せないけどね」

そう言つてため息を吐き、扉を開いてリビングへと向かう。

私の顔をペタペタと鏡の前でさわる。

私の髪型はサイドテール。濃いオレンジ色の髪が気になるが、アニメの世界だから仕方ない。

「おはよー…」

「おっはーゆりりん」

私にゆりりんという変で不愉快なあだ名をつけているのはしののの？たばねという人らしい。

うさ耳をつけ、かわいいもの好きの変人。

マイペースという言葉は彼女の為にあるようなものだ。

自分が気に入つた、気になつたもの以外には無関心。私の前世での学生時代（そのせい？で成績が2、3だった）を思い出す性格をしている。

私のI S『賢王』を作り出した人物だ。

親はいる。東さんに存在は認識してもらえてるようで何よりだ。

むしろなついてるんじゃないかな

「ご飯できてるわよ。今日から学園生活なんだから、気を付けないと」  
「初日から遅刻は、目も当てられんからな」

「はーい、いただきまーす」

そう言つて私は口にごはんを押し込んだ。

「♪♪」

「おはよー」

「あ、おはよう布仏さん」

「おはよーゆりつちゅー」

この人の名前は布仏のほとけ

ほんね。

一応、私の親友だ。

かわいい。

揉みたい。

「ゆりつちー、おめめこわいよおー」

「……ごめん、本音ちゃん」

すぐに謝る。黙つても良いことはないしね！

「それにしても……男性操縦者が一人、かあ……」

「どんな人だろうねー」

「悪い人では、ないといいけどね」

「…………」

「…………な、なあ」

「奴等と目をあわせるんじゃあないぞ織斑。俺と予習した内容を頭のなかで反芻するか寝て視線を無視するんだ織斑。」

「わ、わかつたぜ」

くつそ……完つ全になめてかかつていたぜチクショ一…………こんなにたくさんの中線が集まるなんてよお……

しかも、なぜか俺の顔までよくなつてる始末だ……この状況ではある意味幸運かもしれないけどな？

…………もう1つ気になる事がある。布仏さんと、仲良く話している女子。

あの人は、いつたい？